◎野木京子
短い行数のなかに、鮮やかな映像を見せてくれる詩、ドラマ性を感じさせる詩、何が書かれているのかよくわからないのに妙に心に引っ掛かってくる詩、そういう作品に惹かれます。心惹かれた佳作作品と、私のささやかな感想を、以下に。

街角で明るい服の人ばかり見る
私もうすぐ生まれ変われる　　伊丹真
＊気持ちが塞ぎ、世界がモノクロに見えていた日々。鮮やかな色彩が目に飛び込むようになったのは、苦しい時期から抜け出しつつあるから。微妙な心の変化を捉えた。

半返し縫いくらいの可動域で
この世につなぎ留められている　　西春奈
＊ひと針進んで半針返す、半返し縫い。絶好調で突き進むことはできず、ちまちまと、一歩進んでちょっと戻って生きている。半返し縫いは進む速度は遅いが、丁寧に針を刺すときれいで丈夫な縫い目になる。懸命に生きていたら、振り返ったとき、きれいな縫い目がきっと見えるはず。

おはようと おやすみなさいが
同居する
３LDK 四人と一匹　　加藤悠
＊はっきり意味がわからなかったけれど、なんだか楽しい。朝起きてくる家族と、これから寝る家族がいる。ゆるやかに心がつながっている家族＋ペットの情景。

首かしげるマリオネット
月明かりが差し込む物置部屋　　ウラン２３８

＊音のない静けさ。だれも来ない物置で、どうしてだれも来ないのだろうと不思議がるお人形の姿が童話的。アンデルセン『絵のない絵本』のお月さまの優しさも思い出した。

マル害の母
そう呼ばれながら
警察の
固い長椅子で
待たされた夜よ　　加藤 美紀

＊加藤さんは切ない詩が多い。この詩も切なくてドラマ性がある。マル害は警察の隠語で被害者のこと。どんな事件が起こったのか書かれていないからわからないけれど、緊迫感に満ち、「待たされた夜よ」の「よ」が嘆息に聞こえ、余韻の使い方も巧い。

みずあさぎ色から
あかね色へ
濃い薄いを繰り返す
今日という空　　ひかるちゃん

＊みずあさぎ色はとてもきれいな色。時間の流れとは、空の色が刻々と変化することでもあるという、そういう大切なことを思い出させてくれる。

脳天にぽかりと
穴のあいた貝の
時を返して欲しそうな殻　　北ロカ

＊生と死。貝殻に穴があいているのは、ツメタガイという巻貝が二枚貝にとりつき、ぐりぐり穴をあけて中身を溶かして吸い取るからだそうだ。なんとも恐ろしく壮絶な捕食の仕方。命の時間を返せと、殺された側の貝殻がうらめしげに沈黙の叫びをあげている。

指先が空に引く軌道を見てた背泳　　春町　美月

＊春町さんは今月もよい佳作が多く、好調。私も水泳をやっていたからこの感覚はよくわかる。懸命に、一心不乱に指先の軌道だけを私も見詰めた。競泳は、特別な時間が流れていた。

向日葵が頭を垂れる
夕焼けに
あやまりたかったこと、
思い出す　　桜望子

＊頭が重たく俯いているヒマワリは、世界への謝罪の姿勢だという発想に驚かされた。過去の時間に駆け戻って謝ることはできない。戻ることができない時空があるという〝遠さ〟も感じる。「あやまりたかったこと、」の「、」でひと呼吸おいてから行をあけて「思い出す」と続く、繊細さ。

子が描く私は
いつも三つ目　　うすしか

＊この詩はあまりにも不思議でおかしくて、おもしろい。母が心眼を持っていることを、子はきちんと見抜いている。見えないはずの心眼を見て、絵にかいてしまうという子のすごさ。

響きが消えたとき
私が終わって
雨と朽葉の匂いがした　　はすた

＊過去形で語っている死後の世界。生きるとは、さまざまな響きのなかに存在すること。死後の世界は、湿った腐葉土の下にあるのか。

だれもさよならと言わない
ほんとうの別れの時には　　門野あおい

＊さよならだけが人生だ、と漢詩を訳した井伏鱒二の名言があるけれど、ほんとうの別れの時には、たしかにだれもさよならとは言わない。言う暇もないからかもしれないし、いずれまた来世で会えるからという想いがあるのかもしれない。

めいっぱい空受け止める黄水仙　　長谷川柊香

＊青い空と黄水仙の、色彩の対比が鮮やか。「めいっぱい」で空からの圧迫感が出ている。耐えて背を伸ばし、生へ向かおうとする水仙の花のけなげさ。